

ンパクトが、歌集編纂といった事業とどのように結びつくのか、ということである。

和歌は、その詠むことのくり返しの長い歴史の中で、いずれ和歌自体の

小 子 の 跡

——日本靈異記上卷第三縁小考——

一

靈異記に開闢神話があるらしいといえ、意外に受け取られるかも知わらない。靈異記は仏教の説教書であり、仏教説話集なのである。そういう性格の作品の中に、神話、とりわけ、この世界の創造を語る神話があるということは一寸考えられないからである。しかし、崩れに崩れたものであるにしても、それを垣間見させてくれる話が見られるようである。上三の話である。

然る後に生まれし児の頭に蛇を纏ふこと二遍、首尾後に垂れて生まる。長大りて年十有余の頃、朝廷に力人ありと聞きて試みむと念ひ、大宮の辺に来て居り。ここに時に臨みて王の力の當時に秀れたるあり、大宮の東北の角の別院に住む。その東北の角に方八尺の石あり。力ある王、住家より出でてその石を取りて投ぐ。すなはち住処に入りて門を閉ぢ、他人を出入せしめ

要請によって撰集への過程をたどるはずであったのであろうが、そこに、いかなる人の力が、いかなる時に發揮されたのであろうか。

守 屋 俊 彦

ず。小子視て念はく、名に聞えたる力人はこれなりと念ふ。夜、人に見えずその石を取りて投げ益すこと一尺なり。力ある王、見て手拍ち攢ねて、石を取りて投ぐ。小子より投げ益すことを得ず。小子また二尺投げ益す。王見てまた投ぐれども、なほ益すことを得ず。小子の立ちて石を投げし処、小子の跡深さ三寸踐み入り、その石もまた三尺投げ益す。王、跡を見、ここに居る小子、石を投げたりと念ひ、捉へむとして寄れば、すなはち小子逃ぐ。王、小子の逃ぐるを追ひ、小子牆を通りて逃ぐ。王、牆の上を踰えて追ふ。小子もまた、返り通りて逃げ走る。力ある王、終に捉ふることを得ず、我より力益れりと念ひ、更に追はず。

一体、この上三は道場法師の善根奇異譚であるが、次の四つの小話から成っている。

(1) 農夫が報恩として雷から小子を授かる。

- (ロ) 小子が王と力競べをする。
 (ハ) 小子が元興寺の鬼を平げる。
 (ニ) 小子が元興寺の田に水を入れる。
 ここに掲げたのは、その回の部分にあたるのである。

二

この話は昔話らしい語り口になっていて面白い。雷の子である小子——この話では雷の生まれ変わりということになっている、——は王と力競べをしているのだが、その一つ一つの動作が、目にみえるように細かく描かれている。王が石を投げる。小子はそれを一尺よけいに投げ返す。また王が投げ返す。こんどは小子は二尺よけいに投げ返す。そこで王はまた投げる。しかし、小子より以上に投げ返されない。そこで、王は小子を捕えようとする。小子は垣を抜けて逃げる。王が追う。小子は廻れ右して逃げる。とうとう捕えられない。ここには、二人が競争する光景が、まるでテレビの録画をゆっくり廻すように、一こま一こま描かれていて、そこにこの話を語り伝えていく人々の語り口や身振りまでも想像せしめるものがある。

ところで、この小子の競争相手が王となっているところには問題がある。王は権力者である。力競べをするというのに、「朝廷に力人ありと聞」いて、ほかならぬ、その王を相手に選んでいるのである。しかも、からかっているようなところさえみえる。そこには、貧しき自度僧としての景戒の、権力者への心情がこめられているともいえよう。権力者への批判である。そういえば、この後の(ニ)のところでも、王たちが元興寺の田に水を入れるのを妨害し、それにたいして優婆塞——小子——は、「我、田の水を引か

む」といって、田に水を入れている。水争いであるが、その相手が王たちであり、その王たちの執拗な妨害に対して敢然と立ち向かっているところに、こうした姿勢がみられるのである。そればかりではない。中二十七では、この小子の孫にあたる力女は、夫のために織った布を横取りした国守を、「二つの指もて国の上の居たる床の端を取り、居多ながら国府の門の外に持ち出で」ているのである。ここでは、権力をかさにきて無法を働く者に対して、ひるまず堂々と抵抗しているのである。権力者への反抗である。このようにみてみると、これら一連の話には、反体制的な意識が流れているともいえよう。そこに景戒の一つの顔がある。しかし、このようにきわめて政治的なことを、この話では、鋭い形でそのままにだすのではなく、昔話の語り口で柔かくユーモラスに描いているところに面白さがある。

三

さて、この時小子が石を投げたら、「小子の跡深さ三寸踐み入」ったとある。強力である小子が大きな石を投げるために踏張ったので、足が土の中に踏み込んだということなのである。

このように足が土の中に踏み込んだ話としては、高天原に昇天してくるスサノヲノ命を迎えるアマテラス大神の姿を描いた条がある。

すなはち御髪を解きて、御角髪に纏きて、すなはち左右の御角髪にも、また御鬘にも、また左右の御手にも、各八尺の勾璽の五百箇の御統の珠を纏き持ちて、背には千入の鞆を負ひ、ひらには五百入の鞆を付け、また稜威の高鞆を取り佩ばして、弓腹

振り立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪如す蹶散かして、稜威の男建踏み建びて待ち問ひたまひしく、「何故上り来つる。」と、とひたまひき。(記)

しかし、ここには足が土の中に踏み込んだのみあって、足跡のこゝまでは記されていない。なぜこの話では、小子の「跡」のことをわざわざ記さねばならなかったのであろうか。そこに、この話の前身がちらついてみえるのである。

このように人の足跡をテーマとした話としてはダイダラ坊説話がある。それは一種の巨人伝説であるが、とくに足跡を記しているところに特色がある。⁽²⁾

武相の国人常にダイラポツチとて、形大なる鬼神がゐたことを話す。相模野の中にある大沼といふ沼は、大昔ダイラポツチが富士の山を背負つて行かうとして、足を踏張つた時の足跡の窪みである。またこの原に藤といふものの少しもないのは、彼が背負繩にするつもりで藤を捜し求めても得られなかつた因縁を以て、今でも成長せぬのだと伝へてゐる云々。

今の横浜線の渕野辺停車場から見える処に、一つの窪地があつて水ある時にはこれを鹿沼と謂つてゐる。それから東へ寄つてこれも鉄道のすぐ傍に菖蒲沼があり、二つの沼の距離は約四町である。デエラポツチは富士山を背負はうとして、藤を求めて相模野の原ちゆうを捜したが、どうしてもないので残念でたまらず、ぢんだら(地団太)を踏んだ足跡が、この二つの沼だといふ。またこの原の中には幅一町ばかり、南北に長く通つた窪地がある。デエラポツチが犢鼻褌を引きずつてあるいた跡と称し、現にその地名をふんどし窪となへてゐる。⁽³⁾

これらの話と並べてみると、とくに足跡のことを書いているところからして、この話も本来はダイダラ坊説話ではなかつたかという気がするのである。⁽⁴⁾

もっともこの話には、山を背負つたというようなことはないし、さらにいえば、決定的な相違として、ダイダラ坊説話では巨人であるのたいして、この話では小子となつてゐることである。小さいのである。主人公が巨人であるということが、ダイダラ坊説話の一つの条件なのだから、この点からすれば、この話をダイダラ坊説話とみることはできない。

しかし、これはこの上三の話全体の構成の上から考えてみればよいことのように思われる。この小子は、先にも述べたように、雷の子なのである。その雷は(1)のところ「雷その人の前に落ちて、小子と成る」とあるように、古代人は小子として認識していたのである。後のものではあるが、今昔物語集にも

とばかりありて、空くもり細かなる雨降りて、雷電霹靂す。願主これを見て恐ぢ怖れて、これ前々の如く塔をやぶるべき前相なりと思ひと、嘆きかなしむ。聖人は誓ひをおこして、音をあげて法華経を読みたてまつる。その時に、年十五六ばかりなる童、空より聖人の前に堕ちたり。その形を見れば、頭の髮蓬の如くに乱れて、極めて恐ろしげなり。(卷第十二の第二)

というようなことが書かれている。古代人にとっては雷は神であつた。その神のこの世での姿を小子として認識したところから、雷もまた小子となつたのであろう。その雷の子なのだから、当然小子でなければならぬのである。

つまり、ここにはダイダラ坊説話を取り入れられていると思われる

るのだが、前の(4)の話とのつづきからして、巨人が雷の子に入れ替り、そこから小子となってきたのである。巨人のままで持ち込んだのでは、矛盾してくるからである。(4)や(5)の話にしても、小子ではあるが強力であり、それが鬼を平げたり、大きな鋤や石を使って水を田に入れた、というところに話の面白さもあるのである。山を背負うような巨人であったならば、当り前なのであって、必ずしも面白くはないえないのである。この後の話への展開からしても、小子にならなければならなかったのである。つまり、この小子は、あのダイダラ坊説話の巨人の変身なのである。極度に矮小化されたものなのである。いってみれば、この小子の像の中に、巨人が鑄込まれているともいえるのである。だからこそ、ここに小子の「跡」のことがとくに記されなければならなかったのである。従って、王もまた「跡を見」と、その足跡に目をつけることになるのである。もっとも、ダイダラ説話の巨人そのものが、あちこち歩いているうちに、小さくなる傾向もあったようである。上総の立木ではダイダポの足跡が一畝と何歩の麦畠になっているし、甲賀郡の鮎川と黒川との境の山路では、さらに小さくなって、巨石の上の尺許の足跡になっている。足跡がだんだん小さくなっているのだから、その持主の主人公も、巨人からだんだん小さくなっているものとみななければならぬ。すれば、ここで小子になっても、べつに不思議はないのである。極度に小さくなったものとみて置けばよいのである。

四

実は、このような現象はこの話の他のところにもみられるようで

ある。例えば、この小子が強力であったということである。それはこの小子のもっともすぐれた能力なのだが、一応この小子が雷の子であったというところからきているともいえよう。雷は神である。その雷の子なのだから、異常な力に恵まれていた訳である。⁽⁶⁾しかしこれもダイダラ坊からきているのかもわからない。彼は山を背負って歩いているのだから、もとより強力であったに違いない。その強力を小子はそのまま受け継いでいるのである。山を背負ったダイダラ坊が、ここでは大きな石を投げる小子の像となっているのである。

なおいえば、この小子が早く走ったということがある。王が小子を捕えようとしたところ、「終に捉ふることを得ず」とある。足が早かったとみななければならない。これはこの話の後日譚である中四の話で、この小子の孫である力女と三野の国の狐の直の四代目の孫にあたる力女が争う話があり、この狐の直が「走ること疾くして鳥の飛ぶが如し」(上二)であったのに対抗させる意図からこのようにしたのかもわからない。しかし、これもダイダラ坊の特質が変形したものとみられるのである。勿論、ダイダラ坊が早く走ったという話はない。ただし、彼の足が長かったというのがある。昔デンデンプメという巨人が羽黒山に腰を掛けて鬼怒川で足を洗ったとか、播州山崎では路をまたいで偉大なる毛脛が山上から川の中へぬっと突込まれていた、⁽⁷⁾などという話がある。巨人の特徴を足が長かったということによって表わしているのだが、その巨人が小子に変身したのでは、足の長さによってその特徴を表わすことはできない。そこで、足は短くても早く走ったということに変わったのかもわからない。もっとも、足が長ければ早く走れることのできる訳だから、ダ

イダラ坊自身も早く走ったのかもわからない。

ところで、この小子は(イ)の話では優婆塞となり、元興寺の田の水を枯らさなかった功により、得度出家して道場法師と号したとある。この道場法師という一風変わった僧名について柳田国男氏は

思ふに道場法師といふ僧名は、必ず何物かを暗示してゐるのであらうが、我々は未だ其端緒をすらも捉へることが出来ぬ。京都と其四周の地に於ては、太古に国土を開いた巨人の名を、通例は大道法師と伝へて居る。それと道場法師と同一人であらうといふ説の根拠は、必ずしも文字の共通、もしくは岩の上に遺つた下駄の齒ばかりでは無いやうである。⁽⁸⁾

というようなことを述べていられる。ここでは必ずしもはっきりとはいはいていられないけれども、道場法師という僧名がイダラ坊という名と関係があるらしいことを示唆していられる。

もしそうだとするならば、この上三の話には、イダラ坊の話が色濃く投影しているものとみななければならぬ。形の上では(イ)の力競べの話、それも小子の「跡」のところにかすかにみられるにすぎないのだが、この話全体の線になっているのは、イダラ坊の話にあつたということになる。イダラ坊の話の核にし、雷神と巫女との神婚神話や、雷神の職能などを結びつけて構成されていろうことにならう。

五

さて、このようなイダラ坊説話は、風土記にも散見している。⁽¹⁰⁾ それらの中でとくに注意を引くのは、播磨風土記託賀郡の話であ

る。

右、託加と名づくる所以は、昔大人ありて常に勾まり行けり。南の海より北の海に到り、東より巡り行きし時、この土に到りて云ひしく、「他し土は卑ければ、常に勾まり伏して行きしに、この土は高ければ申びて行けり。高きかも」と云ひき。故、託賀の郡といふ。その踰えし迹処、数々沼と成れり。

託賀郡の郡名由来譚となつてゐるが、主人公が大人であり、「その踰えし迹処、数々沼と成れり」とあるところからすれば、これがイダラ坊説話であることはいうまでもないことである。

ただし、この話では、山を背負つたというような点はない。その代りに「常に勾まり行けり」としてゐる。どうして勾まつて行つたのか、ということについて大人は、「他し土は卑」かつたからだとしてゐる。そして「この土は高ければ申びて行けり」というところから、託賀郡の地名の説明へと持つて行つてゐる。それにしても、「土は卑」かつたとか、「土は高」かつたとかいふのはどういふことなのであろうか。それは天が低い、高いということであり、従つて、大人は「丈が高く天につかえるために身をかがめたという」(大系本風土記注)ことになるのである。この天が低かつたり、高かつたり、というところから、この話がさらに開闢神話へと遡つて行くことになるのである。

これについては、すでに倉野憲司博士に卓説があるので、これによりながら説明してみたい。天と地とがどのような形にできたかということについては、いろいろな型の神話があるのだが、その一つとして、もともと天と地とはくっついてゐたのだが、巨人が上と下とに引き離し、今みるような光景になつたのだとするのがある。そ

れが開闢神話（天地割判）である。如何にも、古代人らしい素朴な発想の神話である。倉野博士は沖繩の

大昔天地が近く接して居た時代に、人は悉く蛙の如く這ってあるいた。アマンチュウ（大始祖神）は之を不便と考へて、或日堅い岩の上に踏張り、両手を以て天を高々と押し上げた。それから空は遠く人は立つて歩み、その岩の上には大なる足跡を留めることになった。

という話や、ニウジーランドの「昔々天の父と地の母とは緊く抱擁して少しも光明を漏らさなかつた。その間に生れた七柱の子は甚だ迷惑がり、森の神タネといふ一子が逆立ちして頭を地につけ、足を以て天を押し上げた。それ以来天は常に高所に止まり、妻なる大地を恋しがって、その泣く涙が雨となり露となつて落ちるのである。」という話などと比べられながら、この話がこうした話の破片であるとし、そこから、この国にもこのような開闢神話があったことを推定され、つまりは、古事記の「天地初発之時」というのを「アメンチハジメテヒラケシトキ」と訓じていられるのである。この託賀郡の話の軸にして、そこから古事記の訓読にまで持つてゆかれたのは、まことに素晴らしい着想といわなければならない。

六

それはともかくとして、この託賀郡の話が開闢神話の破片としてみれば、土は卑くかつたとか土は高かつたとかいうのはよく解る。前者は天と地とが未だ十分に離れていない状態を指すのである。後者は天がずっと高く上昇したことを示していることになる。ただし、この話では、託賀郡の地名を説明するために、余所の

土地と此処との別々の場所でのことになり、大人も天と地とを引き離すのではなく、身をかがめて行くということになったのであるう。

そこで問題となるのは、この話では、開闢神話がダイダラ坊説話と結びついているということである。だから、ここから推測してみれば、ダイダラ坊説話の今一つ前の段階は開闢神話ではなかつたらうか、ということが考えられるのである。あの巨人の仕事にしても、山を背負って歩いたということよりも、天と地とを引き離したとした方が、より壮大であり、それだけに原始古代にふさわしいといえるだろう。

すれば、この小子の話のずっと背後に、このような開闢神話の存在を推測することも、或は可能であるかも知れない。勿論、今みる話のどこにも、それを思わせるようなものはみられない。ダイダラ坊説話としてみても、すでに崩れてしまっているのである。ただ、この話を透視板にして、そのずっと遙か彼方に、こうした神話の風景を遠望してみたいのである。それは幻のようなものかも知わらないが、必ずしも可能性のないことでもないのである。

ところで、この話を読んで一寸疑問に思うのは、その場所がはっきりとしていないことである。上三の(イ)は尾張国、(ロ)は飛鳥でのことになっているのに、この(ロ)だけが場所が記されていない。(イ)の話とのつづき具合からすれば、尾張国のようにも思える。しかし、朝廷や王のいる大宮があるのだから、尾張国にすることはできない。すれば、この上三の話が敏達天皇の御代のこととなっているのだから、その宮のあった磐余あたりとするのが適當であろう。

そこから直線的に結びつけてみれば、この話の前身であるダイダ

ラ坊の話が磐余あたりに伝承されていたということにもなる。もつとも、これは違った解釈も可能なのである。(1)の話のように、尾張国に伝承されていたものが大和国に持ち込まれ、この地に定着したとしてみるのである。ダイダラ坊説話には、「羽黒山が、昔デンデンボメといふ巨人の落して往つた山」⁽¹²⁾であるというように、この巨人が山を背負って落ちたのが何々山である、というのがある。ところで、古事記にこのような話がある。

ここに阿遲志貴高日子根神、大く怒りて曰ひしく、「我は愛しき友なれこそ弔ひ来つれ。何とかも吾を穢き死人に比ぶる。」と云ひて、御佩せる十掬剣を抜きて、その喪屋を切り伏せ、足もちて蹶多離ち遣りき。これは美濃国の藍見河の河上の喪山ぞ。

これは天若日子の葬儀の話と一緒にしているのだが、喪屋を蹴飛ばしたら、落ちてきて喪山になった、というところには、或はダイダラ坊の話の一部が變形して入っているのかもわからない。美濃国は尾張国の隣である。すれば、尾張国にこのような話が伝承されていたともいえよう。

しかし、山が落ちて何々山になったという話は、実は、大和にもあるのである。伊予国風土記逸文に

伊予の郡、郡家より東北に天山あり。天山と名づくる由は、倭なる天の加具山、天より天降りし時、二つに分れて、片端は倭の国に天降り、片端はこの土に天降りき。因、天山といふ本なり。その御影を敬礼ひて久米寺に奉りき。

とある。伊予の天山に関連して語られているのだが、加具山が空から落ちてきたことになっている。どうして落ちたのかということとは

欠けているが、或はダイダラ坊説話の破片とみられないこともない。そういえば畝傍山と耳成山は武蔵坊がかついで来たという昔話があるとのことである。⁽¹³⁾ダイダラ坊が武蔵坊に変身しているのだが、これで見ると、大和三山がダイダラ坊によって運ばれたとか、空から落ちてきたとかいうような話がかつてあったのかもわからない。

その大和三山、とりわけ加具山は、磐余のすぐ近くにある。磐余の範囲を少し広くとれば、その中に位置しているといってもよい。すれば、この話の前身であると思われるダイダラ坊説話が磐余あたりに伝承されていたとみて置いてもよいのではないだろうか。だからまた、そのもう一つ前の段階である開闢神話がこの地方に伝承されていたということも、或は推測されるかも知からない。

七

ところで、この上三の話について黒沢幸三氏は、その核が(1)の鬼を平げる話や(2)の元興寺の田に水を入れる話にあり、それはもともと元興寺の縁起譚であり、それらに(1)や(2)の話をつけて、一篇の道場法師伝に組立てられたのであり、それをしたのは元興寺に関連を持っていた景戒たち遊行僧であろうとされている。⁽¹⁴⁾この成立過程についての説明は示唆に富むものであり、従うべきものであろう。そこで思うに、その際飛鳥に近い磐余あたりに伝えられていたダイダラ坊説話がとり入れられたのではないだろうか。ただし、そのままではなく、上三の話の一部分にふさわしく、巨人が小子になるなど、さまざまに変形が施された上である。その時昔話の語り口を借りて面白くしたり、競争相手を王にしたりしたのは、遊行僧一般

というよりか、景戒個人とした方がよいのではないだろうか。景戒は、奈良から飛鳥に来て、元興寺に出入りしているうちに、この話を手に入れ、これに細かい文学的な細工を施したり、自らの心情をこめたりして、靈異記の冒頭を飾るにふさわしい話として磨きあげたのであろう。

一方、ダイダラ坊説話の一つ前の段階である開闢神話は、記紀の神話が形成される時、その一コマとして吸いあげられたらしい。磐余が大和朝廷にとって重要な土地であったとすれば、この地方に伝えられていた神話がとり入れられることは十分に考えられるのである。ただし、創世神話としては系図型神話や創造型神話などが幅広くとり入れられたために、話そのものは消え失せて、「天地初発之時」という短い章句の中に塗り固められるような恰好になったのである。そして、この神話の中味はダイダラ説話に変身し、さらに崩れてこの小子の話になったのである。いってみれば、この小子は、あの天と地とを引き離した偉大なる巨人の、もっともوراぶれた姿ともいえるのである。

注(1) このことについては、拙稿「因果を信けず——靈異記の説話利用——」(『日本靈異記の研究』所収)の中において詳しく述べた置いた。ご参照願いたい。主として(イ)の部分について論じたものである。

(2) 民俗学辞典 一五二頁 「巨人伝説」の項目

(3) 定本柳田国男集 第五卷 三〇八頁——三〇九頁

(4) この小子の足跡とダイダラ坊との関係については、すでに早く柳田国男氏が簡単ではあるが、「松屋筆記のダイダラポツチの条」は、台記文安二年九月二十七日の条を引いて、近江の石山寺に道場

法師の履の跡といふ靈石のあつた記事を掲げて居る。大道法師の方は多くは素足の足跡で、其形が非常に大きい、それでも此だけの一致は他には少なかった。靈異記の文にも道場大石を投げたとき、足の跡土に入ること三寸云々と記してあるのである。」(定本柳田国男集 第九卷 六七頁 注11)とふれられている。

(5) 定本柳田国男集 第五卷 三一―頁 三一七頁

(6) 拙著 日本靈異記の研究 五三頁

(7) 定本柳田国男集 第五卷 三一―頁——三二二頁

(8) 同前 第九卷 六五頁

(9) 拙著 日本靈異記の研究 五一頁

(10) 常陸風土記那賀郡大榑岡の条に、「上古に人あり、体極めて長大きに身は丘壘の上に居りて、蟹を採りて食ひき。その食へる貝、積聚りて岡と成りき。時の人大きに朽ちし義を取りて、今大榑の岡といふ。その大人の踐みし跡は、長さ三十余歩、広さ二十余歩あり、尿の穴址は、二十余歩許あり。」とあるし、播磨風土記揖保郡枚方里の条にも「大見山大見と名づくる所以は、品太の天皇、この山の嶺に登らして四方を望み覽給ふ。故、大見といふ。御立せし処に盤石あり、高さ三尺許、長さ三丈許、広さ二丈許なり。其の石の面に、往々に窪なる跡あり。この御脊、及御枕の処といふ。」とある。後の例では、ダイダラ坊が天皇に変身している。

(11) 倉野憲司博士 日本神話 日本文学大系 第六卷 八七頁——九〇頁

○頁
なお、最近だされた「古事記全注釈第二巻上巻篇(上)」においても、このことを詳しく説明されている(三〇頁——三二頁)。

(12) 定本柳田国男集 第五卷 三一―頁

(13) 同前 三一―頁

なお、神代紀口訣に、「天の上に山あり、分れて地に墮ちき。一片

は伊予国の天山と為り、一片は大和の国の香山と為りき。」とあり、大和国風土記逸文とされているが、この伊予国風土記逸文の記事を要記したものであろう（大系本風土記四九六頁頭注）。

(14) 黒沢幸三氏 靈異記の道場法師系説話について〔同志社国文学〕第七号) 三頁 九頁
(15) 拙著 日本靈異記の研究 三三頁

古代文学协会会员名簿

昭和五十年一月十日現在

維持会員

青木 生子	151 渋谷区富ヶ谷一三〇三三	屋崎 暢殃	161 新宿区下落合四一三	神野志隆光	231 横浜市中区西ノ谷二六八
阿蘇 瑞枝	170 豊島区東池袋三七二四 寄池マ	長田 貞雄	036 弘前市富士見町三三六	鴻巣 隼雄	214 川崎市多摩区千代ヶ丘四二〇一
市村 宏	184 小金井市桜町一八二二	小野 寛	171 豊島区目白一二二二四四	近藤 信義	180 武蔵野市御殿山二二六二
伊原 昭	151 渋谷区元代々木四九二〇三〇六	賀古 明	158 世田谷区奥沢一三五五	菅野 雅雄	196 昭島市玉川町二四二六
江野沢淑子	154 世田谷区若林一四一三	加藤 静雄	466 名古屋市中区和区車田町一四四	杉崎 重遠	152 目黒区中根二一九八
大久保広行	336 浦和市三室二四九八	川上 富吉	359 所沢市青葉台二三〇六	高野 正美	197 福生市熊川七
大久間喜一郎	177 練馬区関町六四三三	川口 常孝	188 保谷市本町一四二〇	高橋 六二	356 川越市今福六二
緒方 惟章	252 神奈川縣高座郡綾瀬町小園一九	木下 玉枝	351 和光市白子二一三三	塚田 六郎	154 世田谷区若林五三二四
	一一六	桑山 恵右	120 足立区足立三七一	露木 悟義	258 神奈川縣足柄上郡開成町円通
			一四	寺三	一三